



私の仕事は、
地方公務員（行政事務）です。

人と地域をつなげる



私の仕事は、農家です。

お客さんと家族のためにつなぶ農家
地域を担うこと

私の仕事は、営業です。
↓
地元の仲間の輪をひろげること



私の仕事は、花屋です。

人と街をつなぐコミュニティ花屋



interview

社会人8人に聞く

あなたの仕事は何ですか？

公務員、看護師、農家…こういった職業名を聞いて、どのような仕事を想像しますか？「データサイエンティストってどういう仕事？」「エンジニアって何をする人？」と生徒に尋ねられたら、どのように説明しますか？「仕事＝職業」ではないのではありませんか…という問いを起点に、一人ひとりお話を伺ってみることに。すると、職業というカテゴリーではまとめ切れない、その人ならではの仕事が見えてきました。



私の仕事は、
ソフトウェアエンジニアです。

↓
パソコン1つで世界を創ること



私の仕事は、看護師です。

自分で道を切り拓く看護師

私の仕事は、
データサイエンティストです。
↓
今日より明日を良くすること



私の仕事は、
鉄道作業員です。
↓
人知れずあたりまえをつくること



山口県 観光スポーツ文化部
文化振興課 主査
矢野 展子 さん

1

私の仕事は、**地方公務員（行政事務）**です。

人と地域をつなげる

京

都の大学を卒業後、地元に戻り山口県職員として働いています。初任地は岩国健康福祉センターで、その後は本庁の人事課、国際課、財政課、医療政策課、教育政策課を経て、現在、文化振興課に属しています。異動の間隔は3年ないし4年。そのたび業務内容も職場の雰囲気も変わり、転職したような新鮮な気持ちになるとともに、「一から勉強だ」と引き締まります。ただ、法律に基づく仕事という基本は共通で、経験を活かせることも多く、物事がより俯瞰的に見えるようになってきました。私の場合、許認可や人事、予算対応など、行政職員らしい業務が多いですが、

県庁には、外部へのプロモーションを積極的に行う産業振興系の部署や、独創的な企画が求められる広報や観光関連の部署もあります。異動が多いということは、どんなタイプの職員でも持ち味を発揮できる場があるともいえるんです。

職場は県内とは限りません。特産物の販路開拓や観光客誘致の部署では海外で働く機会も多いし、私も留学生・研修生の受入や交流事業の関係で海外出張もしました。山口県東京事務所などでの勤務や、中央省庁への研修派遣、民間企業との交流人事も盛んです。

こうした点も含め、高校生が抱く公務員像と実際とでは多少のギャップがあるかもしれません。「安定」した職場と言われますが、安定の意味が雇用や待遇ではなく、「単調な業務をこなし定時に帰れる仕事」というイメージであれば、実際は違います。部署にもよりますが、業務量が非常に多くなる時期もありますし、常に世の中の動きを把握し、情報をアップデートする必要もあります。

仕事の進め方も、個人の裁量に任される部分も多く、積極的に提案することも期待されます。私自身、国際交流協会の方と話すなかで外国籍県民の災害対応に課題を感じ、解決策を提案し後任につなげたこともあります。想像以上に「やってみたい」が受け入れられるダイナミックな職場だと思います。

終日職場にこもっているわけでもありません。業界団体の方と話したり、各地の現場に出向いて意見を交換したりしながら、大局的・政策的な視点で地域の役に立ちたいと考えています。ただ、地元といっても、広島県に接した岩国市から、九州との結びつきが強い下関市まで広く、暮らす人々の立場や考え方も多岐にわたります。学生時代のボランティアで、ある県の全域を選挙カーで回ったときの感想が思い出されました。「いったい、これだけ多くの有権者に応えられる政策なんてあるのだろうか」と。どんなに良いと思える施策でも、全員に納得してもらうことは困難です。それでも地道に対話を重ねることで物事を少しでも良い方向に進めたい。それが私の原動力です。行政職は何かのスペシャリストではありません。けれど、専門家と地域の方など、普段会わない人同士をつなぐことはできますから。

やの・のぶこ ● 1981年生まれ。京都大学文学部卒業後、山口県職員。岩国健康福祉センター（健康福祉部）、人事課（総務部）、国際課（観光スポーツ文化部）、財政課（総務部）、医療政策課（健康福祉部）、教育政策課（教育庁）を経て、2025年4月より現職。



結農園
関谷啓太郎さん

結農園
関谷早紀さん

2

私の仕事は、農家です。

地域を担うこと (啓太郎) お客さんと家族みたいにつながる農家 (早紀)

啓太郎 三重の農業法人に10年勤めたのち、米農家として独立するため、妻と千葉の里山に移住しました。運よく田んぼが借りられ、古民家も紹介いただきました。高齢化した農家が多いなか、多少経験のある若手が来たため温かく迎えられました。軽トラやコンバインなども融通いただき感謝しています。

今の私の仕事は米作りが中心。田植えから収穫まで一人でできる規模でやっています。それと害獣駆除も。千葉の農家はキョンという大繁殖した外来動物に困っていて、免許を取得し罠を仕掛けています。役場から捕獲報奨金が出るため家計の足しにもなってます。

早紀 私の仕事は、注文を伺い新米を出荷すること。直販主体なので、**家族の**

ようなつながりができることが楽しくって。うちのお米を食べて育ち、高校生になったという話も聞けるんです。

以前は介護のパートもしていましたが出産を機に辞めました。その代わり、収穫した作物で何か作ろうと試行錯誤するなか和菓子に可能性を見だし、近隣のマルシェで販売しています。あんこ炊きから練習を重ね、自分好みに甘さを抑えたところ好評で、ファンも増えました。一緒にお米を買われる方も多く、毎週末各地で出店しています。



啓太郎 キャラの表情など(写真)、見た目がとてもかわいいんです。お米袋もカラフルなオリジナルデザイン。発送時に同封する「結農園新聞」には、イラストや漫画を描くこともあるんです。

早紀 趣味も兼ねてますが、お客さんに喜んでもらいたいのが第一。お米を研ぐ作業って面倒だけど、少しでも気分を明るくしてほしいって。新聞も、私たちのことを知り、コミュニケーションのきっかけにしてほしいからです。

農家として独立してよかったのは、やりようによっては何者にでもなれること。なんたって“和菓子屋さん”にも、“デザイナー”にも、“漫画家”にもなれていますから。好きな時間に好きなことをやってるので楽しくて仕方ありません。

啓太郎 独立すると、失敗はすべて自分たちに返ってきますが、納得はできませんよね。米作りも、日々やることだらけですが、「次は何をして、どう世話しよう」とってわくわくします。だから農閑期になると春が待ち遠しくて。

懸案は、周囲の農家の後継者問題です。皆さん受け継いできた田んぼを私たちに託したいんです。その期待に応え地域を担いたいし、この風景を守りたい。それは温かく迎えてくれたことへの恩返しにもなります。ただ、私たちだけでは限界があります。解決策は、新規就農者を1組でも増やすこと。そこでYouTubeも使って自分たちの経験を発信しようと計画中です。家も田んぼもなく、伝手もないところから始めた私たちの経験は参考になるはず。魅力よりも、「生活費はこうで、売り上げはこれくらい。こう工夫すると貯蓄も増える」といった具体を伝えることで不安を払拭し、仲間を増やしていきたいです。

せきや・けいたろう／さき●1980／1989年生まれ。啓太郎さんが勤務する三重県の農業法人に、都内の大学生だった早紀さんがインターンシップに参加したことが二人の出会い。ともに実家は非農家だが、米作りの楽しさや農村の温かさに触れ独立を決意。2015年に千葉県いすみ市に移住し、翌年「結農園」を開業。

(株)ヤッホーブルーイング
県内・軽井沢営業ユニット
飯田祐眞 さん



3

私の仕事は、営業です。

↓
地元の仲間の輪をひろげること

「よ

なよなエール」というクラフトビールをご存知でしょうか。私はその製造元、ヤッホーブルーイングで営業の仕事をしています。茨城出身の私がなぜ長野に本社や醸造所を置くビール会社に就職したか。きっかけは、大学院で、総合型地域スポーツクラブの研究をしていたとき、こんな話を聞いたことです。「欧米で盛んな住民自治のスポーツクラブでは、運動を終えた人々がクラブハウスに集まり、年代に関係なく、おしゃべりに興じる。その中心には決まって地域のビールがある」と。人好き、ビール好きの私は、「ビールには、そんな素敵なつながりを生む力があるのか」と心が躍りました。そし

て、個性的なビールやイベントで多くのファンの心を掴んでいる弊社のことを知りました。大手のビール会社に就職したら、シェアの奪い合いに追われるかもしれませんが、この会社なら地域と関わる仕事ができると思いました。

入社4年目の今は営業部門に所属。コンビニを含む県内全域の小売店や軽井沢地区のホテルを担当し、バイヤーさんに製品を提案したり、勉強会を開いたり、ブランディングやマーケティングにも関わっています。期間限定の新製品を世に出す際は、製造部門とコンセプトをすり合わせ、パッケージデザインについても意見を出し合います。

年間を通して試飲会やフェスなどのイベントも多く、その企画や運営も私の仕事です。つまり、販売して終わりではありません。そのため目標はあっても売り上げノルマはないんです。営業部門のミッションは「クラフトビールで三方^{たの}楽し」というもの。三方とは売り手・買い手・世間のことです。私たち自身が楽しみながら、お客様がワクワク楽しめるような体験、例えば、数千人規模の人が集うファンイベント「よなよなエールの超^{ちょうたげ}宴」がその代表ですが、エンタメ性のある体験価値を提供し、そのうえで業界や地域を盛り上げ、“仲間”の輪を広げていく仕事だと感じています。

本業以外でも、地域に関わりたいという入社前からの希望は実現しています。入社直後、地元(軽井沢・御代田・佐久)を盛り上げようと、有志スタッフによる「地元プロジェクト」が立ち上がり、私も加わりました。地元の魅力を社員が投稿する写真コンテストを皮切りに今も多くの地域貢献活動をしています。弊社の良いところは、やりたいと手を挙げれば後押ししてくれること。就業時間の2割を、直接業務と関係ないプロジェクト活動に充てていいんです。

プライベートでも、地元の花火大会やカーリング大会などを手伝ってますし、駅前の交流スペースが、夜の部(酒場)を始めてからは、終業後、副業として働いています。そこで知り合った方と仕事につながることもあります。それが狙いではありません。目的は、**真の意味で“町の人”になって、仲間の輪を広げること。**いつまでも移住者扱いでは地域を盛り上げることはできませんから。

いいだ・ゆうま ● 1993年生まれ。筑波大学大学院で、豊かなコミュニティや社会づくりに関心をもち、2021年ヤッホーブルーイング入社。現在、「県内・軽井沢営業ユニット」(別名 軽井沢Cheers!)に所属。同社は「働きがいのある会社」として知られ、自由に意見が言える組織醸成のため雑談朝礼ほかニックネーム制を導入。飯田さんはスタッフや取引先から「ばんだ」の愛称で呼ばれる。



komatokamo
オーナー
中島満香さん

4

私の仕事は、花屋です。

人と街をつなぐコミュニティ花屋

自

分でも不思議ですが、20年近くコンサルティング会社に勤め、今、花屋を経営しています。きっかけは、コロナ禍でリモートワークが続き、働き方や生き方に疑問が生じたこと。好きな花に囲まれたくなり、^{かき}花卉市場に足が向いたんです。何とか仕入れられたのですが、まとまった単位でしか購入できず、自宅に飾るには多すぎました。ならば町の人に格安でお分けしようと、自転車に積み近所をウロウロし始めたんです。でも人って、呼び止めてまで物を買わないんですね。そこで、店休日の鞆屋さんの軒先に「ご自由にどうぞ」と処分品が置かれていたのに便乗し、その横で腰を据えたところ

る買い手がつくようになりました。けれど、靴屋さんのオーナーが戻ってきて平謝り。誠心誠意経緯を説明したところ、毎週末、軒先を使う許可を頂けました。ご好意はそれだけではありません。翌年その「路地裏花屋」が軌道に乗ってきたタイミングで、高齢のため靴屋さんをたたむということで格安で店舗を貸していただけることになったんです。

こうして2022年、念願の実店舗をオープンしました。私の業務は、金曜早朝、市場で一週間分の花を仕入れることから始まります。車いっぱいの花をスタッフと店に運び、水揚げしたり、棘や葉を落としたりして商品棚に並べるまでに数時間。水をこまめに変えることも重労働です。でも、大好きな花に囲まれて過ごす喜びは何物にも代えられません。昔の同僚が店に来ると「別人?」と驚くくらい顔つきも変わったようです。

オーナーとのご縁は続き、内部で行き来できる隣の店舗も使えることになりました。ただ、花屋を拡張しても大きな利益は見込めません。そこで、花のワークショップや料理教室などのイベントも実施できる、地域に開かれたカフェを開業しました。片隅では有機野菜も販売しています。ですから今、花屋で、八百屋で、カフェで、コミュニティスペースでもある変わった店を運営していることに。コンサルティングの仕事も続けています。私の専門は公共事業に民間の力を巻き込むこと。会社員時代のような大規模プロジェクトではなく、「地域のことは地域の人で」をテーマに、地元の企業やNPOを自治体の地域づくりに活かしたい。その点、花屋もカフェも、人と街をつなぐコミュニティハブとしての機能も期待してるんです。初対面の方に「官民連携のコンサルです」と自己紹介しても「何それ」状態ですが、「花屋です。コンサルもしてます」と言うと興味津々。花は心のバリアを外す素晴らしいツールなんですよ。

私は、計画的に花屋になったわけではありません。生き方を模索するなか、偶然の出会いも活かし、ピースがはまるように今の形にたどりつきました。時おり本業が何かわからなくなりますが、人間って多面的な生き物。なので仕事も多面的でいいかなって。そんな花屋もあることを高校生に知ってほしいです。

なかしま・みか ● 1975年生まれ。筑波大学大学院修了後、建設技術研究所およびPwCアドバイザー合同会社に勤務し、公共事業の計画立案や官民連携のアドバイザー業務に従事。2021年に「路地裏花屋」を開始し、2022年にJR駒込駅近くに実店舗「komatokamo」をオープン。さらに2024年には地域の拠点となるべくカフェ「Farm to Home」を隣で開業。





5

私の仕事は、ソフトウェアエンジニアです。

↓
1パソコン1つで世界を創ること

世

界中のさまざまなメディアから情報を集めてユーザーに届けるニュースアプリ『SmartNews(スマートニュース)』のシステム開発に携わっています。なかでも有料会員向けの記事について、記事の収集・分析・分類から、システムの設計、プログラミング、サービスの運用テスト・公開まで、いわゆる「ソフトウェアシステム」の一連の開発業務を担当しています。入社以来、オフィスとリモートのハイブリッドワークで、会議はオンライン、社内コミュニケーションはチャットが中心です。また、エンジニアは多国籍で、主に英語と日本語を使っています。

仕事をするうえでは、周囲とのコミュニケーションが不可欠です。企画の立案・管理を行う「プロダクトマネージャー」とタッグを組み、どのような目的のために何を実現したいのか、そのためにはどのようなシステムが必要か、どのような仕様にすれば将来的なニーズにも対応できるか…といったことを詰めていきます。また、現在担当しているプロジェクトでは、エンジニアのまとめ役「テックリード」を務め、メンバーの合意をとりながらチームで開発を進めています。こうした業務を円滑に行うために気をつけているのが、相手への伝え方です。良くも悪くもエンジニアはストレートな表現をしがち。例えば、「これって意味あるんですか?」とズバッと言われたら、戸惑う人もいるはずです。フラットだけど相手への配慮を忘れない、そんな関係性づくりを意識しています。

私はものづくりが好きで、システムを作ったりプログラムを書いたりすることが楽しくて、エンジニアになりました。私にとって仕事は育成ゲームのような感覚で、努力をしてスキルや経験値が身につくと、次のステージに上がる…というプロセスに面白さを感じてきました。一方、エンジニアとして働くなかで、楽しいだけでなく、作った先にある目的に共感できる仕事がしたいと考えるようになりました。そして、現在の会社に転職。決め手は、「世界中の良質な情報を必要な人に送り届ける」という会社のミッションでした。自分が開発に携わったサービスやツールを使った人から、役立った、便利になったと言われると嬉しいですが、その先にある新しい価値や世界の創造にこそエンジニアの仕事の魅力があると感じています。

小学生の頃からパソコンを触るのが好きで、ガラケー用の着メロを自作したことも。「パソコンとインターネットがあればなんでもできる!」というワクワク感が、エンジニアとしての原体験になっています。エンジニアの間には、所属する組織を越え連帯感があり、情報や技術はオープンにしてみんなで共有しよう、みんなが世の中をより良くしていこうという空気があります。パソコンとインターネットがあればなんでもできるというのは決して大げさではなく、世界を変えることだってできるし、自分もその一員でありたい。そう思っています。

みねた・はつね ● 1997年生まれ。京都大学工学部情報学科卒業。中学時代から開発系の仕事に憧れる。大学では情報学の理論を学び、アルバイトを通してプログラミングの知識・技術を習得。ソフトウェアエンジニアとして就職し、2023年にスマートニュース(株)に転職する。





Five Star
訪問看護・栄養管理Station
代表取締役・管理者・看護師
朝倉之基さん

私の仕事は、**看護師**です。

自分で道を七刀り拓く看護師

看

看護師として大学病院で18年間勤務したのち独立し、訪問看護ステーションを立ち上げました。現在は、現場でスタッフが判断に迷った際に指示を出したり、うまく処置ができないときにサポートに入ったりと、現場で働く看護師たちをバックアップしながら事業所の経営をしています。

訪問看護に初めて興味をもったのは、看護学生時代のこと。実習で在宅看護の現場に伺い、人工呼吸器をつけて生活されている方を見て、「医療現場＝病院」という固定観念が覆されました。同時に、患者さんや家族の暮らしに

密着した看護があることを知り、自分もいつかやってみたいと惹かれました。

卒業後は、医療の最前線で看護師としての経験を積みたいと考え、大学病院に就職。神経内科、がん治療センター、集中治療室などを経験し、中間管理職も務めました。忙しい日々を送っていましたが、コロナ禍で会議や研修といった業務がなくなり時間ができたことで、自分の今後のキャリアについて考えるように。ふと浮かんだのが、「訪問看護をやりたい」という学生時代の純粋な思いでした。しかし、18年間積み上げたキャリアもあり、訪問看護ステーションで新人スタッフとして働くという選択肢は現実的ではなく、それならば働く場所を自分でつくろうと起業を決めました。経営の知識も身近に起業の事例もなく、まさに手探り状態でしたが、一つひとつ壁を乗り越えていきました。

病院勤務時代は、目の前の患者さんをより良くすることが、自分にとっての課題でありミッションでした。それが、経営する立場になって変わりました。利用者さんやご家族のことを第一に考えるのは同じですが、**その先にある社会課題に目が向くようになり、会社の存在意義を考えるようになったんです。**誰もが適切な場所で適切なケアを受けられるようにするためには、地域の医療インフラの整備が不可欠です。この課題に対して、「訪問看護」というリソースを提供することが私たちの役目です。そして、私たちが事業活動を通して目指しているのは、住民が安心して暮らせるまち、住みたくなるまちです。そんなまちにするには、医療の前段階として健康を保つための介入も必要だよね、高齢者だけでなく次世代をつくる子どもたちへのサポートも大事だよね…と課題への関心はどんどん広がっていきました。そして、高齢化の進む団地のまちおこしなどに携わるなかで、さまざまな人と出会い、つながりが生まれ、志を共にする仲間が増えていきました。

今、私の目の前には、学生時代にも病院勤務時代にも想像していなかった世界が広がっています。今後やりたいことの 하나가、子ども食堂を軸にした「まちの保健室」をつくること。看護師や管理栄養士に気軽に健康相談ができて、夜は高齢者向けの居酒屋にもなる、そんな場所を構想しています。

あさくら・ゆきもと ● 1981年生まれ。認定看護管理者。栄養治療専門療法士。NST専門療法士。東海大学医学部付属病院勤務を経て、2021年に訪問看護ステーションを起業。現在は看護師のほか理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士が所属し、在宅でのQOLを高めるトータルケアの提供を目指している。



(株)アトラエ
シニアデータサイエンティスト
杉山 聡さん

7

私の仕事は、~~データサイエンティスト~~です。

今日より明日も良くすること

私

はデータサイエンティストとしてIT系企業に勤務し、主にデータ分析と分析を使った機能開発に取り組んでいます。一例を挙げると、自社で運営している転職サイト『Green』の検索機能について、どのような単語が誰によってどのくらい検索されているのかといったデータを基に、検索の性能を優先的に上げるべき領域を洗い出し、性能を上げるためのプログラムを作る、といったことをやっています。また、会社のAI戦略策定を担い、最新AI技術や業界の動向についての情報収集や未来予測を行い、それを社内に周知するという仕事もしています。

データを扱ううえで大事なのが、「データを使って何をするか」です。顧客のニーズはどこにあるか。ニーズに対してどのような価値が提供できるか。そのためにはどのようなデータと分析が必要か。その実現のためにはどのような人材を集め、どのような会社とコラボすべきか。データサイエンティストには、こうしたマーケティングや事業開発の視点やセンスが求められます。理系の職業という印象が強いかもしれませんが、情報系の基礎知識は必須とはいえ、文系出身のデータサイエンティストも多く活躍しています。

データを扱う人間として心掛けていることが2つあります。一つは、倫理的に誇れる仕事をするということです。データは悪用しようと思えばいくらでもできます。怖いのが、悪意なき歪みです。誰か・何かのために良い結果を出したいと思うが故に恣意的な分析をしてしまう…ということが起こり得るのです。こうしたことのないよう、忠実にまっすぐに業務を遂行することを肝に銘じています。

もう一つが、データの分析に自分なりの色を入れることです。顧客のニーズ、データの傾向、分析の手法などからベストな道を探っていくのですが、そこにデータサイエンティストの個性が出るんです。私の場合は、「この分析手法はこういうタイプだな」と性格を汲み取り、課題に合う手法を編み出す感覚です。学校の先生が生徒に合わせて教える内容や教え方を変えるように、料理人が素材に合わせて調理法や味付けをアレンジするように、正解がないからこそ自分らしさを加えることを意識しています。この2つは一見すると矛盾するようですが、両立するところにデータサイエンスの面白さがあるのかもしれません。

今、世界はものすごいスピードで書き換わっています。そして、ITは次の世界をつくる中心勢力の一つです。自分はその領域に身を置いて、今日より明日、明日より明後日をより良くする仕事をしているのだと自負しています。一方、あまりの変化の速さと勢いに、脅威を感じる自分もいます。変わらざるを得ない状況のなか、大事なのは変化を受け入れる素直さと変わる意志をもつこと。これを胸に刻み、これからも新しいことを学び続けていきたいです。

すぎやま・さとし ● 1990年生まれ。数学者を目指して大学院博士課程で学ぶも、世の中に対して出す価値を大きくしたい、今しかできないことをしたいと考え、当時スタートアップだった(株)アトラエに入社。マーケティング職を経て、入社3年目に社内初のデータサイエンティストとなる。



京急電鉄(株) 鉄道本部
施設部 川崎保線区
機械軌道2班 機械軌道係
森崎昌悟さん



私の仕事は、鉄道作業員です。

人知れずあたりまえをつくること

京

急電鉄の施設部・川崎保線区に所属し、保線作業を担っています。「保線」とは、線路のメンテナンスのこと。線路は電車の走行により曲がったり沈み込んだりし、放っておくと電車の快適な乗り心地を損ない、安全な走行にも支障を及ぼす恐れさえ生じます。そうならないよう、線路を正しい状態に保つために行うのが保線作業です。

保線区には、線路状態に異常がないかを検査する「検査班」、主に線路を保守する「保線班」、保守用車で保線作業を行う「機械軌道班」があります。私は機械軌道班に所属し、作業現場までレールや碎石(線路の下に敷く石)な

どを運ぶ車両、レールを削る車両、線路の歪みを直す車両など、10種類ほどある保守用車を運転・操作しています。

なかでも操作が難しいのが、マルチプルタイタンパー、通称「マルタイ」と呼ばれる車両です。マルタイは、縦方向・横方向に歪んでしまった線路のまくら木(線路の下に敷く部材)を支えている碎石部分をつき固めることなどで、歪みを整正します。いずれもミリ単位で整正することが求められ、作業には高度な技術と集中力が必要です。一步間違えば線路を破壊しかねない、リスクを伴う作業でもあります。自動モードでも操縦できるのですが、マニュアルモードで微調整したほうが線路状態が長く保たれ、操作の難易度は高いですがそこはこだわっています。

私は工業高校の機械科出身です。通学で使っていた京急電車の車窓から、線路上にいる作業員の姿を見て、どういう仕事をしているのだろうと興味をもったのがきっかけ。学校の先生に聞いたり調べたりするなかで保線の仕事を知り、現場作業がやりたい自分に合っていると感じ、この仕事に就きました。

実際に働きはじめて実感したことは、仕事の幅の広さとディープさです。基本は夜間工事で、始発までに作業を終えるという絶対的な使命の下、チームにて協働する真剣勝負の日々。事務作業から重たい部品を運ぶ作業まで「こんなことまでするのか」という業務も多く、いかに自分が何も知らずに就職したかを思い知りました。同時に、保線の現場作業が面白そうだった感覚は間違っていなかったことも実感しました。同じ現場でも日によって業務内容が違い、判断力や応用力が試されるシーンも多く、毎日が刺激的で飽きることがありません。努力を重ねることのできる感覚がどんどん増えていく感覚は、やりがいにもつながっています。

不具合が起こる前に、先回りして整備をすることが私たち保線作業員の役目。存在に気づかれないよう裏の世界で輝く、影武者的な存在です。みんなが知らないところでみんなが知らない働きをして、電車に安全・快適に乗れるという「あたりまえ」をつくる。無事に作業を終えると、「俺ら、最高でしょ!」という誇りと大きな達成感に包まれます。

もりさき・しょうご ● 1998年生まれ。神奈川県立横須賀工業高校卒業。2017年に京急電鉄(株)に入社。現在、機械軌道2班に所属し、マルチプルタイタンパーをはじめとする保守用車を使い保線作業にあたる。現在はトロッコ指揮者も務め、後輩の育成にもあたる。